

遺跡に学ぶ

守ろう 群馬の文化財

第35号

学ぼう 群馬の歴史と風土



財団 群馬県埋蔵文化財調査事業団
法人

<http://www.gunmaibun.org/>

3 -2011

調査部長 飯島 義雄

遺跡に学び、 先人に学ぶ

中世初期の未完の用水遺構とされ、赤城山南麓の台地に十数kmの長さにわたって刻まれた女堀について、現在の一般的な理解に納得できず、これまでその全線及び周辺の踏査を続けてきました。併せて、この女堀について先人はどのように理解してきたのか、可能な限り文献を集めて検討しています。そうした中で、伊勢崎市の女堀と粕川の交叉部に立つと、粕川を挟んだ東西の女堀の遺構がどうしても接続するようには見えないのです。

それでは、この地点について先人はどのように理解してきたか、得られる限りの文献にあたってみました。すると、いくつかの文献で引用されていながら未入手で、女堀を理解する上で重要な役割を担いそうな図書があることが判明しました。それは、荒砥第二尋常高等小学校が昭14年に刊行した『荒砥村郷土史』の中で頻繁に引用される『荒砥第一校の郷土誌料』、あるいは『荒砥村郷土誌』、または『荒砥村郷土誌料』でした。『荒砥村郷土史』は県立図書館で閲覧することができるため、それらを同図書館で検索しましたがいずれもヒットしません。それではと、インターネット上で県立図書館のホームページから「県内図書館横断検索」を使用して調べてみてもどこも所蔵していないようです。さらに県立文書館でも国会図書館でも見つかりませんでした。さては万策尽きたかと思い諦めかけましたが、もしもともう一度インターネットに頼りました。それは、「荒砥第一校」つま「荒砥第一尋常高等小学校」を受け継いでいるのはどの学校かということです。県内のほとんどの小学校がホームページを開設しており、そのコンテンツにはそれぞれの学校の沿革が必ず記されていると考えたからです。そう思いつけば、前橋市立小学校のホームページを端から見て行けば良いのです。すると、「荒砥第二尋常高等小学校」は「二之宮小学校」が、そして「荒砥第一尋常高等小学校」は「荒子小学校」が受け継いでいたのです。早速、同校へFAXを入れ、「荒砥村郷土誌」あるいは「荒砥村郷土誌料」の存在を問うたのです。

まもなく、同校の教頭先生から電話があり、「それらしきものがあります」とのことでした。はやる気持ちを抑えながら同校を訪ねると、校長先生のお部屋に案内されました。すると、机の上に数冊の図書が置かれていたのです。それらは、『荒砥村郷土誌資料 前編』、『郷土資料』、『郷土資料 前』、『郷土資料 後編』、『郷土資料 後』とのラベルがそれぞれの表紙に貼られたものでした。内容はいずれも同一で、冒頭のものが正本の前編、他は副本の全部か前編・後編のいずれかだったのです。

「然るべきものが、然るべきところに保管されていた！」

探していた図書に出会え、これほど感動したことはありません。この図書をはじめ、先人が観察して記したそれぞれの時代の女堀の状況とその理解を踏まえ、自らの理解を確かなものにして行こうと考えているところです。

なお、上記の『荒砥村郷土誌資料』につきましては、許可を得ましてそのコピーを本事業団の図書室に架蔵しました。興味を持たれましたらご覧ください。



太田市北東部を通る東山道駅路

主任調査研究員 新井 仁

□東山道駅路と高速道路

東山道駅路は、都と地方を結ぶ幹線道路の一つで、古代の高速道路ともいえるものであり、当時の都であった奈良や京都から、現在の東北地方にあたる陸奥や出羽まで続いている。

北関東自動車道建設に伴う発掘調査により、太田市の北東部、金山丘陵・八王子丘陵と渡良瀬川にはさまれた地域にも、この東山道駅路と推定される道路が通っていることが確認された。

道路が見つかったのは、八ヶ入^{はちがいり}、大道西^{だいにし}、大道東^{だいてう}、鹿島浦^{かしまうら}の4遺跡で、途中調査されていない部分もあるが、両側に側溝を持つ、幅12～13mの大規模直線道路が約900mにわたって姿を現した。まさに、現代の高速道路のために、古代の高速道路が目覚めたのである。

□道路の時期

東山道駅路に限らず、この時代の幹線道路はできるだけ直線で結ぶようにしているため、人里を通ることが少ないが、大道東遺跡では数百軒の住居がある集落の中を通っている。このため、住居との前後関係を調べることで、道路の時期を絞り込むことができる。大道東遺跡の住居と道路の時期を細かく見ていくと、7世紀の第3四半期の住居が道路に壊され、8世紀第2四半期の住居が道路を壊していることが判明した。よって道路は8世紀第3四半期～8世紀第2四半期の間で作られ、さらにその間で廃絶されたと言える。

□道路築造前後の周辺地域

さて、道路の時期が絞られたところで、道路築造前後の周辺地域の状況を見てみることにする。遺跡の南東部には、金山丘陵がある。ここでは、菅ノ沢遺跡をはじめとして、古墳時代に使われた須恵器を焼いた窯が多く見つかっており、古墳時代の上野国で有数の窯業地帯となっている。時期は6世紀後半代が中心で、7世紀以降は丘陵上の他の場所に移っている。

周辺の古墳では、6世紀中葉と推定され、最古式の小形横穴式石室を持つ亀山京塚古墳^{かめやまきょうづか}、横穴式石室、家型石棺を持ち、6世紀末から7世紀初頭と推定される今泉口八幡山古墳^{いまいづみぐちはちまんやま}、菅ノ沢御廟古墳^{すがのさわみびやう}、東毛地域唯一の終末期方墳である巖穴山古墳^{いわあなやま}等が集中している。特に巖穴山古墳は、県内でも数例しかない方墳で、現状で一辺約30mの墳丘や、全長約12mで玄室の手前に前室を持つ複室構造の横穴式石室を有し、この地域の首長ともいえる人物の墓と考えられるほどものである。時期は7世紀前半から中頃と推定されている。

大道西遺跡からは、近隣の古墳から搬入されたと考えられる埴輪が多量に出土しており、特に馬形埴輪は全体の形状が判明している。時期は6世紀後半代を中心としている。

大道東遺跡では、東山道駅路の側溝から、脚が3足付く円形の硯が出土しており、鹿島浦遺跡からも獣の形をした脚が付く円形の硯が出土している。楽前遺跡でも円形の硯が出土しており、東今泉鹿島遺跡では、漆に浸かった紙の文書が出土している。いずれも識字層がいたことを示すもので、当時の地方社会ではかなり位の高い人々が存在したことを裏付けている。

□古代東毛地域の中心地

また、この地の近隣に、「古氷^{ふるこおり}」の地名があり、山田郡の役所である山田郡家の推定地と考えられているが、硯や漆紙文書などの文字関連の遺物は郡家に関係している可能性がある。このように、太田市北東部は、6世紀後半～7世紀前半には、大窯業地帯を擁する地域の首長クラスの人物がいた場所であり、ここに国家プロジェクトともいえる駅路が敷設され、近隣に郡家も置かれて、律令国家における地域支配の一端を担っていたといえるのではないだろうか。



集落の中を通る道路

大道東遺跡の空中写真。中央やや下に並行して2本走っているのが道路の側溝。四角く見えるのはすべて竪穴住居で、道路に重なっているものも多い。



集落の中を通る道路

大道東遺跡の竪穴住居と道路。手前のすでに掘ってある住居（8世紀代）が道路の側溝を壊しており、道路の側溝が外側の住居（7世紀代）を壊している。道路は2軒の住居の間の時期に造られたことがわかる。

巖穴山古墳墳丘と石室

東毛地域唯一の終末期方墳で、県内でも数例しかない。一辺約30m、高さ約5mで、全長11m以上最大幅2m以上ある石室があり、奥壁には高さ約2.8m幅約1.5mの巨石を立てている。時期は7世紀前半から中頃と推定されている。



ハケ入遺跡出土三彩蓋



小形の壺の蓋で、10世紀前半の竪穴住居から出土。他の例では、古代寺院や寺院隣接地、郡衙関連遺跡などから出土することが多く、この地が古代において重要な場所であったことを示している。

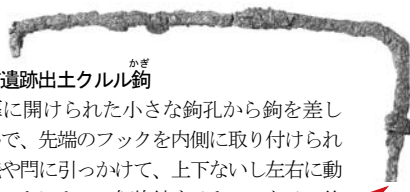


大道東遺跡出土土面硯

東山道駅路北側溝から出土。脚はすべて割れて残っていないが、底部の中心に近い位置に脚が3足付く特異な形をしている。字を書くには必需品であるが、あまり使われた形跡がない。

楽前遺跡出土クルル^{かぎ}鉤

扉に開けられた小さな鉤孔から鉤を差し込んで、先端のフックを内側に取り付けられた棧や門に引っかけて、上下ないし左右に動かすことによって解錠するものである。鉤の出土は倉庫などの建物があったことを示している。8世紀代の住居から出土。



6世紀

7世紀

8世紀

9世紀～

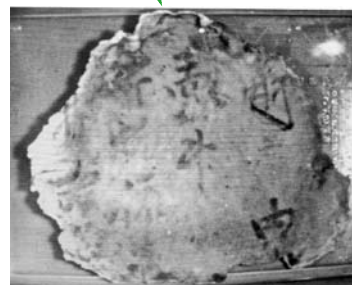
大道西遺跡出土馬形埴輪

高さ98cm、長さ96cmの大型の埴輪である。たて髪、耳、鞍、前脚、尻尾等の一部が欠損しているが、他は残っていた。近隣の古墳に立てられたと推定されるが、詳細は不明。時期は6世紀後半代前後と考えられる。



菅ノ沢遺跡須恵器窯

丘陵の南側斜面に立地し、13基の窯が並行して築かれている。窯はいずれも斜面を掘りぬいた構造で、同じ丘陵斜面上に多くの窯が集中しており、他にあまり例のない大規模な窯跡となっている。



東今泉鹿島遺跡出土漆紙文書

出土例の少ない「借用書」と考えられる文書で、下位の人物・機関が上位の人物・機関あてに出した、米を借りる申込書である可能性が高い。9世紀前半の竪穴住居から出土。



鹿島浦遺跡出土獣脚付円面硯

獣の足の形をした脚が3足付く硯である。字を書くためには必需品で、識字層のいたことを示す遺物である。

『群馬の遺跡5』の読みどころ

群馬の遺跡5 <古墳時代Ⅱ【集落】>

上席専門員 小島敦子

本シリーズは、群馬県埋蔵文化財調査事業団の創立25周年を記念して平成16年に刊行されました。その時の本書の帯に、東京大学で長くポンペイの研究をされた青柳正規先生が、こう書いてくださいました。

「群馬の古墳時代の集落は、榛名山や浅間山の火山噴出物に覆われた遺跡発掘が進むにつれて具体像が明らかになってきた。その成果はイタリアのポンペイを彷彿とさせる。古墳時代の生活や火山災害に立ち向かう先人たちにスポットをあてた本書は、群馬の古墳時代を理解するのに役立つだろう。」

群馬県では数多くの古墳がつくられましたが、その墓の主たちを支えた人々の歴史もまた、地中に埋もれているのです。そういう古墳時代の人々が暮らす集落の様子を描いたのが本書です。

集落には、堅穴住居などがある居住の場、墓のある墓地、水田や畠などがある生産の場の三つの空間からできています。古墳はそのなかの豪族の墓地をみていることになります。農業社会であった古墳時代に、田畠を耕し、ムラに集まって生きていた人々の生活の場が、集落のなかにありました。残念ですが一般農民の墓のことはよくわかっていません。本書では、人々の居住の場、生産の場にスポットをあて、発掘でわかったことを元にまとめました。

本書の構成は、次のようになっています。

- 第1章 こうして古墳時代は始まった
- 第2章 黒井峯遺跡の発見
- 第3章 水田と畠
- 第4章 炉からカマドへ
- 第5章 群馬県の古墳時代集落研究のあゆみ
～入野遺跡から黒井峯遺跡まで
- 付 章 学習へのいざない古墳時代の集落を学習しよう

第1章では、群馬の古墳時代ははじめに多く出土するS字状口縁台付甕を通して、古墳時代の始まりについて概説しています。S字状口縁台付甕は口の部分がSの字をした薄い甕です。東海西部地方にふるさとをもつこの土器と群馬の古墳時代の始まりにどんな関係があったのかを概説しています。

第2章では、榛名山の軽石で埋もれた「日本のポンペイ」黒井峯遺跡のことを概説しています。黒井峯遺跡は、遺跡を覆った軽石を剥がしていく発掘によって、古墳時代集落の具体像が初めて明らかに

なった、日本考古学にとって最重要の遺跡の一つです。発掘当時の視点を再現しながら、何がわかったか、何が重要かを解説しています。

第3章では、群馬でみつかった古墳時代の水田や畠を概説しています。群馬では早くから火山灰などに埋もれた水田や畠の調査がはじまり、全国でも有数の成果をあげています。本書では、傾斜地に水田を開くための小区画水田や溜井の技術、イネをつくっていた畠など、耕地を拡大すること、米を作ることを志向していた古墳時代の農業生産について、発掘でわかったことを概説しています。

第4章では、古墳時代の人々が住んでいた堅穴住居について、どんな構造だったのか、煮炊きの方法が炉からカマドへ変わったこと、またその背景はなにか、家のありかたから何が考えられるかなど、発掘を通して見えてくることについて概説しています。

第5章では、群馬の古墳時代集落がどのように研究されてきたかを、大規模発掘・田畠遺跡の発見・遺跡群研究の実践・これからの集落研究～災害考古学への進化をキーワードに概説しています。

付章では、本文であまり触れられなかった土器や木製品などの生活用具、訪れたい遺跡や博物館、おすすめの本などを紹介しています。

ぜひ、本書を手に取り、群馬の古墳時代に思いをはせて、今ここで暮らすためのヒントをみつけてみてください。



『群馬の遺跡6』の読みどころ

群馬の遺跡 6 <古代>

上席専門員 神谷佳明

シリーズ「群馬の遺跡」第6巻は、古墳時代に続く古代を取り上げています。このタイトルで疑問を持たれる方もいると思います。疑問とは第1巻から第5巻までは旧石器時代、縄文時代、弥生時代、古墳時代と考古学的時代区分を使用しているのに第6巻と第7巻では古代、中世と大区分での時代区分を使用したことです。考古学的には古墳時代以降は歴史時代として一括して扱われています。本書を編集した当時も歴史時代をそのまま使用して古代を歴史時代その1、中世をその2にしてはとか、一般に浸透入している政治的時代区分である奈良・平安時代にしてはとの議論がありました。その中で古代は古墳時代の一部も含まれますが、西暦7世紀から11世紀の時期を扱うため時代を表すタイトルとして一番ふさわしい時代区分として選択しました。

この時代で古墳時代と大きく違う点は文字が広く普及し、「続日本紀」をはじめとする史書、木簡、漆紙文書、墨書土器などの文献資料が残っている点です。しかし、文献資料がすべてを伝えているわけではないため、考古資料が新事実を提示することやより解明することが多くあります。特に文献史料は朝廷を中心とする記述が主であることや、出土文献資料も都からが大部分です。このため地方の様子は発掘調査の成果による点が多くあります。発掘調査では古墳や縄文土器など華やかな遺構・遺物に注目が集まりますが、最も多く見つかった遺構は古代に属する竪穴住居です。そして古代では時代を反映する寺院や官衙、窯業遺跡、鉄生産遺跡など多種にわたる遺跡や遺構も存在しています。

近年、群馬県内でも佐位郡衙正倉院跡である伊勢崎市三軒屋遺跡、新田郡衙正倉院、郡庁である太田市天良七堂遺跡などの古代上野国内の郡衙については大きな成果がみられますが、編集当時は群馬県内での官衙についての発掘成果は上野国府などでわずかな成果しかなかったため触れることができませんでした。しかし、寺院遺構や窯業遺跡、条里制にかかわる成果、文字資料、集落研究など今までの発掘で見つかった成果を十二分に取り入れています。

本書の構成は次のとおりです。

- 第1章 上野国の仏教文化―群馬のお寺事始め―
- 第2章 須恵器生産の盛衰―律令制を支えた器―
- 第3章 班田から開発へ―洪水や噴火の災害をのりこえて―

第4章 地中から掘り出された文字―古代上野国地域の出土文字資料―

第5章 古代の集落研究―愛宕山遺跡から矢田遺跡へ―と「古代神社跡 発見!」、「広く使われた『武蔵型甕』」、「大地に刻まれた地震跡」、「再発見 1枚の富本銭!」の5項のコラム、古代をより深く知るために参考となる博物館・資料館や図書の紹介からなっています。

第1章では初期の大規模な伽藍をもつ白鳳寺院から国分寺と奈良・平安時代の寺院についてと平安時代の村落における堂宇的なお寺までの遺跡、遺構や遺物をとおして仏教が国家や豪族層主体のものから庶民の間にも布教した様子について知ることができます。

第2章は古墳時代5世紀に朝鮮半島から伝えられた須恵器生産が群馬県内への導入、飛鳥時代から奈良時代に土師器から須恵器へ主体が移ることによる大量生産開始、平安時代中ごろに終焉をむかえるまでを知ることができます。

第3章は今までの谷地水田中心から水田耕作地が拡大し、古代の圃場整備ともいえる条里制の様子について知ることができます。

第4章は県内から出土した漆紙文書、木簡、墨書土器などの文献史料についてわかりやすく解説するとともに墨書土器がどのような目的をもったものかをわかりやすく解説しています。

第5章はもっとも多く見つかった竪穴住居からなる集落遺跡の研究についてとその成果、国府と豪族の居宅についてどのような研究がおこなわれているかを解説しています。

以上が本書、「群馬の遺跡第6巻古代」の内容です。群馬の古代史をより深く知りたい方だけでなく入門書としても使えますので是非一読をいただきたいと思います。

『群馬の遺跡』全7巻

財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団編 上毛新聞社発行

定価 各巻 1300円(税込)

お求めは書店または上毛新聞社取扱新聞販売店まで

<写真>群馬の遺跡5・古墳時代Ⅱ【集落】

群馬の遺跡6・古代

発掘情報館の利用と出前授業

主席専門員 齊藤利昭

発掘情報館の利用

群馬県埋蔵文化財調査センターには、群馬県教育委員会並びに群馬県埋蔵文化財調査事業団が30数年にわたり県内の国や県の開発事業に伴う発掘調査を行い、各遺跡から出土した土器や石器などや住居跡や堀・溝・墓などの図面や写真などを数多く所蔵しています。

この膨大な資料を、県内外の皆様に生涯教育や学校教育に活用していただけるよう発掘情報館が設置され、最新の研究成果をもとに館内に設けられた資料展示室、収蔵展示室などで展示公開しています。また、来館された皆様に考古資料を見るだけでなく、出土した土器や埴輪、勾玉などを見て土器作りや勾玉作りなどの体験ができるように体験学習室を設けています。

発掘情報館の学校利用状況

発掘情報館では見学や体験を通して埋蔵文化財の理解を深めていただこうと考え、学校からの施設見学や各種古代体験の依頼を受け付けています。

平成22年度に発掘情報館を利用した学校は、県外を含め46校を数えました。(別表の利用状況グラフ参照。)

発掘情報館を利用した学校を地域別に見ると、発掘情報館の所在する中部教育事務所管内の前橋市20校、渋川市10校を数えました。また、県外からも6校が見学に訪れています。表にはありませんが学年別の利用状況では、5年・6年生が最も多く、大きな学校では100名近く訪れる事もありました。各校の滞在時間は、施設見学を30分～40分、ものづくり体験を2時間程度見込んで午前中の滞在がもっとも多いパターンでした。体験の内訳は、勾玉作りが56%、土器作りが19%、その他と火起こし体験や粉引き体験わずかにあり、持って帰れる勾玉作りが人気です。

特別な依頼では、雨が降った時に緊急避難的に見学を依頼されるケースもあり、1度だけ赤城青年の家での校外授業の際に、山に熊が出て入山禁止となったため急遽発掘情報館の見学と火起こし体験を行った事がありました。

発掘情報館を利用する時期は、5月～8月がピークで運動会シーズンの9月が落ち込みますが緩やかに12月まで見学依頼があります。その反面、冬の依頼は0になります。



資料展示室：日常的に使われた土器や石器以外に装身具や埴輪・火打石・鈴・笛・太鼓・土偶などの道具類に焦点を当て展示しています。他に国指定の重要文化財である太田市塚廻り古墳群出土の人物埴輪(盾持ち人)や房谷戸遺跡出土の縄文土器も展示しています。また、最新情報展として年度毎に報告書が刊行された遺跡や話題の遺跡を取り上げ展示しています。

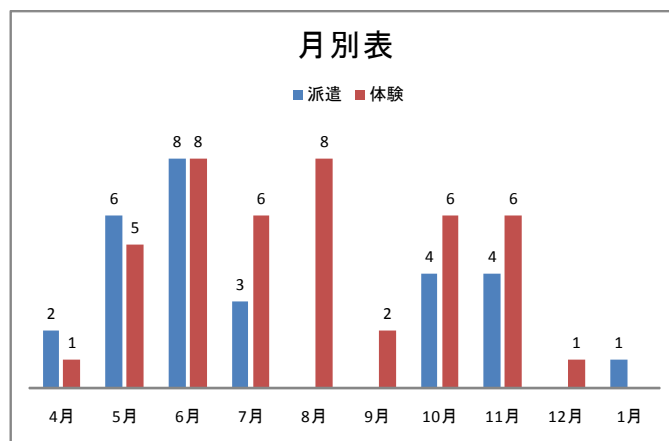


収蔵展示室：考古学では土器や石器などを時間を決める際の物差しとして利用しています。この収蔵展示室では県内の各時代・時期を代表する土器や石器が並んでいます。3万年前の旧石器時代の石器から近代までの土器や石器、金属製品など古代人の技術や造形をご覧ください。



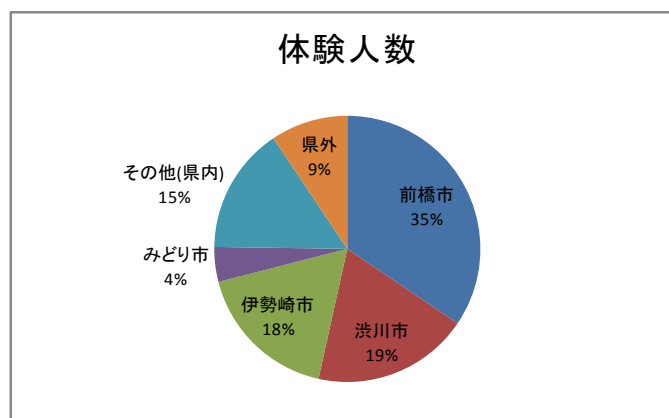
勾玉作り体験の様子：30名を超える生徒数の場合には、発掘情報館1階のピロティを使い各種体験を行っていただきます。120名まで対応可能です。

	派遣	体験(学校数)
4月	2	1
5月	6	5
6月	8	8
7月	3	6
8月		8
9月		2
10月	4	6
11月	4	6
12月		1
1月	1	
	28	43

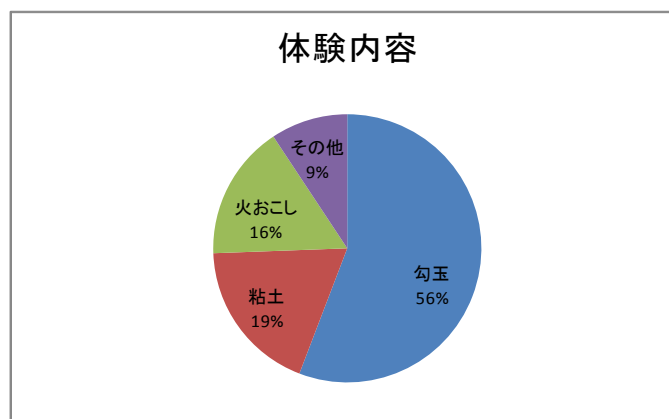


●発掘情報館利用状況

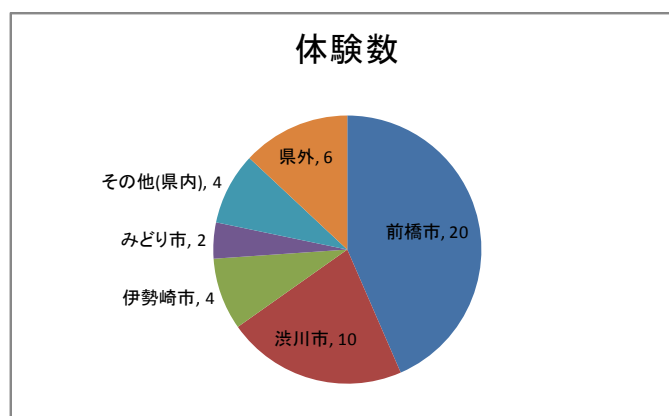
	生徒数
前橋市	768
渋川市	424
伊勢崎市	391
みどり市	94
その他(県内)	343
県外	209



	体験内容
勾玉	24
粘土	8
火おこし	7
その他	4



	学校数
前橋市	20
渋川市	10
伊勢崎市	4
みどり市	2
その他(県内)	4
県外	6



学校への職員派遣

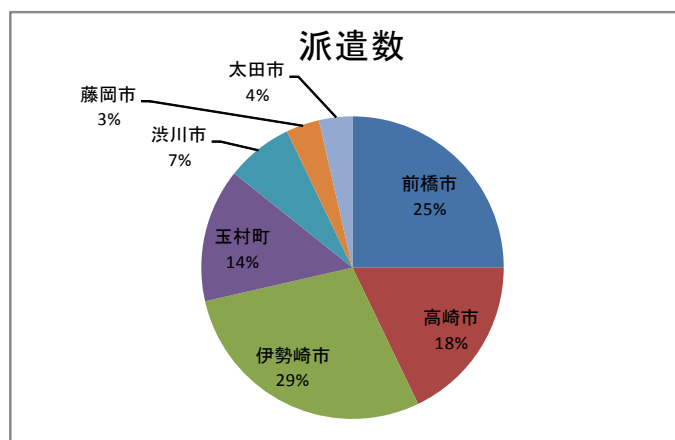
群馬県埋蔵文化財調査事業団では、子供達に埋蔵文化財から得られたその地域や群馬県の歴史、先人の技術や知恵などを理解してもらうため、学校からの依頼に応じて職員の派遣を行っています。派遣授業内容は、2時間程度の時間の中で古代の人々の暮らしや道具についての話と土器作りや勾玉作りを行います。古代の人々の暮らしの話の際には、出土した縄文土器や弥生土器、滑石製の勾玉などを持参します。

平成22年度の学校派遣の状況は、県内28校からの派遣依頼がありました。地域別に依頼校を見ると発掘情報館の見学依頼同様に発掘情報館が所在する中部教育事務所管内の前橋市7校、伊勢崎市8校、渋川市2校、玉村町4校と多く、ついで西部教育事務所管内の高崎市5校、藤岡市1校。東部教育事務所管内では、太田市で1校の依頼がありました。参加者数の集計では、高崎市の398人や玉村町の366人、藤岡市の171人などは学年行事

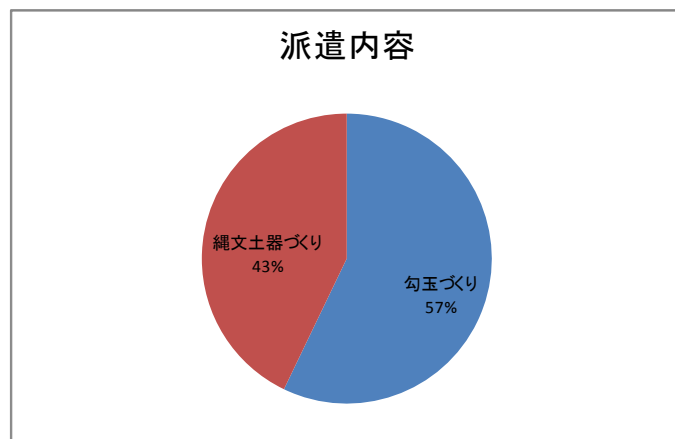
として「親子勾玉作り体験」での親の数が入っています。依頼学年は、5年・6年生が大半を占めています。派遣の依頼時期としては5月、6月が最も多く、夏休みまでに大半の派遣が終了しますが、秋の依頼ではPTAの方々が主体となる学年行事での依頼が増しました。また、依頼される場所として学校が主体ですが、東毛少年自然の家での課外授業に招かれることもありました。

学校派遣の場合、どうしても派遣職員が1名に限られているため、発掘情報館に見学に来て見学・体験するより雰囲気作りが難しくなります。特に土器作りや勾玉作りなどの体験場面で、職員が生徒と接する時間が少なく、子供達の質問にすぐに答えられない事も多くなります。さらに複数の教室に分かれての体験の場合にはさらに生徒と接する時間が短く、「次にどうしたらいいか」と悩み作業が止まってしまう生徒もいたこともありました。時間があればとも考えられますが、授業時間の関係で伸ばすこともできず、結果として土器

	派遣数
前橋市	7
高崎市	5
伊勢崎市	8
玉村町	4
渋川市	2
藤岡市	1
太田市	1
	28



	派遣内容
勾玉づくり	16
縄文土器づくり	12



や勾玉や暮らしの話の部分を短くして対応することが多くなってしまいます。

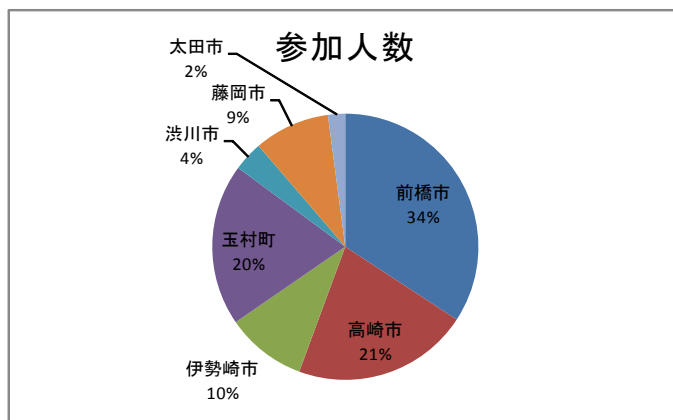
こうした学校派遣の中で、一度伊勢崎南小学校からの依頼で東毛少年自然の家に招かれた際に、木立の中の広場で火起こしと勾玉作り体験を行いました。木枯らしが吹き始めるやや寒い日でしたが、まさしく古代人になったような雰囲気が感じられたのではないかと思います。

派遣依頼は、子供達に埋蔵文化財から得られる受け継がれた歴史と知恵や感情を片隅にでも覚えておいてもらえる良い機会だと考えます。先生方に与えていただいた貴重な時間を有効に使うために雰囲気作りのさらなる工夫が必要であり、そのために学校側から依頼内容をお聞きする際に場所や時間、体験したい物の他に要望など細かく打ち合わせしなければならないと考えます。

発掘情報館見学及び職員派遣の依頼方法

1. 電話連絡にて日時の確認(時期により重複する場合があります、先着順での受付)
◎学年、生徒数(見学では送迎手段としてバスの有無)
2. 依頼内容の連絡
◎見学、土器作り、勾玉作り、火起こし体験等
◎派遣の場合:体験実施場所(教室、体育館、理科室等)※100名を超える場合道具類の調整あり。
3. 材料の連絡
◎発掘情報館見学及び体験の場合は、全て事業団で準備します。(材料費は学校負担)
4. 派遣の場合は、土器作りは職員のための派遣。材料や乾燥・焼成など全て学校側で用意。
勾玉作り体験、滑石・紙やすり・紐を事業団で購入を基本とします。道具類は職員が持参。
4. 依頼文の作成 日時が決定後、学校の書式にて事業団理事長宛に依頼文送付。

	参加人数
前橋市	636
高崎市	398
伊勢崎市	182
玉村町	366
渋川市	67
藤岡市	171
太田市	39



dokidukuri

お知らせ

平成23年度 最新情報展

最新情報展は年3回の展示を実施しますがその第1回展示と講演会について紹介します。

第1期展示 「歴史疾走～北関東自動車道でタイムトリップ」

群馬・栃木・茨城を横断する北関東自動車道の発掘調査からわかった旧石器時代から江戸時代までの群馬の歴史を展示します。

展示期間 ◆平成23年3月19日(土)～8月31日(水)

場 所 ◆発掘情報展2階資料展示室

なお、展示解説を兼ねた講演会も実施します。

講演会 「北関東自動車道で縄文時代にタイムトリップ」

講演会日時◆平成23年5月29日(日) 13:00～15:00

場 所 ◆発掘情報館2階研修室

講 師 ◆関根慎二(当事業団職員)

※展示、講演会とも無料。



夏休み親子宿題教室

「わくわく体験 新発見」

土器づくりや勾玉づくりなどの古代体験にチャレンジ。家族全員で参加し、それぞれ自分だけの作品づくりを楽しみ、夏休みの宿題や自由研究も済ませられる夏のイベント。

期 間 ◆7月24日(日)～8月31日(水)※土曜日は休館

時 間 ◆9時00分から17時00分(体験受付は15時00分まで)

場 所 ◆発掘情報館

費 用 ◆見学無料。各種体験の場合は200円程度の材料費がかかります。

参 加 ◆申し込みは不要ですが、混雑が予想されますので10名以上の団体の場合は事前連絡をいただきたい。

その他／クイズラリーや土器作りコンテストも行う予定あり。

表紙の写真
発掘情報館 収蔵展示室